

Evaluation of mapping biopsies for extramammary Paget disease: A retrospective study

加来, 裕美子

<https://hdl.handle.net/2324/4475002>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : (c) 2017 by the American Academy of Dermatology, Inc.

(別紙様式2)

氏名	加来 裕美子
論文名	Evaluation of mapping biopsies for extramammary Paget disease: A retrospective study
論文調査委員	主査 九州大学 教授 加藤 聖子 副査 九州大学 教授 森 正樹 副査 九州大学 教授 江藤 正俊

論文審査の結果の要旨

乳房外 Paget 病は完全切除が達成できれば、予後は比較的良好な悪性腫瘍とされている。しかし、時折境界が不明瞭であったり、予想外に病変が進展していたりと正確な切除ラインの設定が難しいという問題があった。本邦では、術前にマッピング生検を行うことで切除マージンを設定する方法がとられてきたが、侵襲の大きい方法であるにも関わらず、その有用性について十分な検討がなされていなかった。

申請者らは、境界明瞭な病変と不明瞭な病変の 2 つのグループに分け、マッピング生検の有用性と切除マージンについて後ろ向きに検討を行った。133 名、150 病変を対象とし、マッピング生検として 975 ヶ所を統計学的に検討した。

検討の結果、マッピング生検の有用性は限定的であり、境界明瞭な病変では手術時の切除マージンを 1cm、境界不明瞭な病変では 2cm 確保できれば、術前のマッピング生検は必要ないと考えた。一方で、境界不明瞭な病変で切除マージンを 2cm 未満に縮小したい場合にのみマッピング生検を考慮しても良いと考えられた。

以上の成績はこの方面の研究に知見を与えた意義ある成果であると考えられる。まず申請者の役割・貢献度を尋ね、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した後、本論文について研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容や関連した事項について種々質問を行い、いずれについても適切な回答を得た。よって、調査委員合議の結果、試験は合格とした。